

(7) 付表1では、 k^1 が k^2 , k^3 が k^4 , w^1 が w^2 としてしめされてゐる。この表の k^4 は k^5 の、 k^5 は k^4 の、それぞれ誤植であらう。すなわち、本文でらわゆる k^4 は、 w^4 ではなく、 w^5 を指すと考へるべきである。

(8) V. A. Livšic, "O proishozhdenii drevnejurkskoj runičeskoj piš'mennosti", *Arheologičeskie issledovanija drevnego i srednevekovogo Kazahstana*, Alma-Ata, 1980, s. 9.

(9) 前註(9)参照。

A. Róna-Tas, "On the Development and Origin of the East Turkic "Runic" Script", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus XLI (1), 1987, pp. 7-14.

黄文弼著・田川純三訳

ロプノール考古記(二終)

榎 一雄

一

ロプノール地区というのは、北はクルック・ター、南はアルキン(アルシン)・ター、東は玉門・陽関、西はチンリク以東に圍まれた、タクラマカン砂漠東端の地区を指す。その中央にロプノールを擁する。ロプノールの海拔は八七〇米。タクラマカン砂漠の最低部をなす。史前時代にはロプノールは塩水湖で、タリム河及びコンチエ河の水を入れていた。タリム・コンチエ灌溉地域の拡張に伴って河水の激減を来たし、九、十世紀には一四、〇〇〇平方斤に達したロプノールの面積は、一九六〇年代には最大三、〇〇〇平方斤余に減じ、その長さ一〇〇斤余、水深約一米、底辺と周辺とは塩の泥沼で、水位の低い時は幾つかの水溜りに分かれ、或る部分は乾いた塩の層に覆われる。十一月から三月までは大部分は底まで凍り、年によると、タリム

河は南流してロプノールに達せず、チエルチェン河に合流、カラコシユン湖に注ぐ。カラコシユン湖はプルヂェワールスキのロプノールで、一面茅で覆われている。プルヂェワールスキが一八七六年洪水の時に調査したものである。それが一九二一年水が北の旧ロプノールに移り、更に一九七二年十月に至っては既に水を失って乾湖に變し、今日に及んでいる。黄文弼は水が北移し、旧ロプノールの北岸に達した時に、ロプノールに至ったのである。(以上の記述の中、一九六〇年代までのロプノールの状態は、ソ連大百科第三版(Lohor, Vol. xiv, 1956)クズニエーツォフの記述による)。

黄文弼は一九三〇年春トゥルファンでの作業を終って、楼蘭の故址に向うべく出発したが、出水に阻ばまれて目的地に行けず、已むを得ず道を南に取って、ロプノールの北岸土垣の古址に達した。それまで南方カラコシユンに流れ込んでいた水が、河道の変遷によって本来の北に位置を変えたのである。ロプノールの位置の新しい変化は直ちに黄文弼等によって学界に報告せられた。それは一九三〇年のことで、黄文弼は一九三四年再びここを訪れた。

黄文弼の『ロプノール考古記』は、二回に亙るこのロプノール地区、更に正確に言えば土垣を中心とするその北岸の調査の記録なのである。黄氏はいう。

批評と紹介 榎

私のロプノール調査は前後二回になる。第一回は一九三〇年春であった。私たちはトゥルファンでの作業を終えたのち、四月八日、ルクチン南のドゴルを発ち、クルック山を越えて六日ほどでロプノール湖畔に達した。二〇日あまり調査をしたのち、五月六日にロプノール湖畔に達した。往復合せて一ヶ月であった。

二回目は一九三四年でやはり春であった。当時の教育部を代表して新疆の教育および文化の調査にあたったのであるが、兵乱(回族の乱)に阻まれたために南行してロプノールの調査にあたった。すなわち、五月初めドゴルを出発してクルック山中のイントルクシ(英都爾庫什)に至り、そこから西に道をとってクルック河畔に至った。往復合せて一ヶ月あまりであった。

私のこの二回の旅行は、いずれも時間が短く、踏査は不十分であった。ただ、われわれが幸運と思うのは、時間は短かったけれども収穫が多かったことである。とくに漢烽火台址での発見は予想外の収穫であった。さらに古墓及び石器の発見がそれに次いでいる。

かくて黄氏は調査の結果を石器・古墓・古代遺址の三項に分けて説明している。

『ロプノール考古記』の本文は、(一)緒論、(二)作業概況、(三)器物図説、(四)木簡考釈の四編に分けられる。この中、(二)作

業概況以下の三篇が土垠を中心とする地域の遺物の採集と分類と解説とであつて、本文の中核を成し、(一)緒論は(1)ロプノール河道の変遷と砂漠の移動、(2)楼蘭国歴史略述、(3)楼蘭および鄭善における中国と西方との交通上の地位、(4)楼蘭文化と中国の経営、(5)仏教の伝来とその文明の五章から成るタリム河道変遷史と楼蘭史との研究である。

言換えると、本書は(一)ロプノール北岸の考古学的調査と、(二)ロプノール河道変遷史の主として記録による研究と、(三)これ亦主として文献による楼蘭史の研究との三部から成つてゐる。この中、最も光彩を放つてゐるのは、ロプノール北岸の考古学的調査、就中、新石器時代の遺蹟、古墓、並びに土垠の発見と調査とである。

ロプノール北岸を中心とする地域には石刃・石核・石矢・石鏃等打製細石器が多数に分布して居り、蒙古・トゥルファン・楼蘭に見出せるものと種類・形・製作法を同じくしてゐることが知られ、それらの地域が文化の交通路であつたこと、住民が漁獵牧畜に必要な用具に専ら注意を払い、農耕には少しも注意を払つてゐないことが知られる。これらに混つて銅製品或は陶片が出土するが、それらは隣国の住民が既に農耕時代に入つて居り、その銅器文化がロプ石器文化に入りこむことによつてロプ後期の金石併用文化を成立させたのであるという。

第一回ロプノール調査に際し、黄氏は古墓五基を発見、そのミイラの一つを图示している(付図一四)。楼蘭のミイラについてはよく知られてゐるが、ミイラの古墓に麻黄の小枝を副葬品にすることに於いて、黄氏はスタイン・レンドル(Dr. A. B. Rendle)・ベリヤン(F. Bergman)の所説に共鳴して楼蘭の原住民はインドのパーシー教徒と密接な關係があつたことになるとしている。黄氏曰く(一四八頁)。

ここで私は中国の資料を引いて研究の助けとしたい。スタインが述べている跋希は、中国の資料にある白題バイタイ西と音が近い。杜佑の『通典』(卷一九一)西戎伝にいう。

且末国、漢の時通じるなり。北は尉犁、丁零に接す。東は白題西と接し、波斯、精絶、(東は白題、西は波斯、精絶に接し、の誤読)南に小宛に三日の行にて至るべし。地に葡萄などの諸果あり。人は皆断髮にして氈帽を着す。小袖の衣を着け、衫あり(衫は?)。開襟にして前にて縫う。

この『通典』の記述は、『梁書』末国伝と字句が少し異なる。『梁書』はいづ。

末国、北は丁零、東は白題、西は波斯と接す……。思うに、この二書はともに脱字と誤りがある。もし「東

は白題、西は波斯、精絶に接す」ということになるという意味が通じない。ペルシヤはパミールの西にあるのだから、どうして接することができよう。そこで、ここでは「東は白題西に接し、西は精絶に接す」というべきである。もともと「波斯」は白題西の小註のなかに記されたもので、つまり白題西は波斯人を表わしていたものと思う。それを後世の人が、小註を正文の中に記入してしまい、かつ「西接」の二字を削除したために、意味がついに不明瞭になってしまったのである。『太平寰宇記』（卷一八一）が「東は白提に接し、西は波斯、精絶に接す」と引用しているのは、同様の錯誤である。けだし「波斯」は「白題西」の下の小註とすべきものなのである。

もし私の解釈に誤がなければ、且末の東は白題西人、すなわちペルシヤ系の人によって占められていた。また中国の史書の記述によれば、且末は三国時代にはすでに鄯善に併呑されていた。それゆえ、『通典』にいう且末人は、漢代の鄯善人に当るうか。現在、崑崙山中にイラン語を操るガルチャ族というのがあるが、あるいはこれがその末裔ではないだろうか。（一四八頁）しかしこれは明かに原文の誤読である。『通典』に引く所は、且末国、漢の時通ず。〔中略〕北は尉犁、丁零に接す。

東は白題（提）、西は波斯、精絶に接し、南は小宛に至ること三日可（提）。地に葡萄諸果有り。人皆翦髮・氈帽、小袖衣を着し、衫を為すには則ち頸を開きて前を縫う。と読むのがより正しく、「西は波斯、精絶」の精絶はこれを欠く『通典』もあるので、恐らく誤って入ったもので、無いのが正しいであろう。そしてここにいふ且末国は『梁書』卷五四に末国とあるのに従うべく、今日のトゥルケメニアのマルイ（Mary）の東方にあったマルフ或いはメルフ（Marv）に当つべきである。マルフ又はメルフに末を当てたのは『梁職貢図』が最初で、後世の書（例えば『通典』）がこれを且末と誤つたのに相違ない。『通典』の且末をメルフに当てれば、その西は波斯であり、その東は白題（Bakhti = Bactria = Balkh）である。また且末の西に精絶があり、南に小宛があり、北尉犁に接するといふのは『漢書』西域伝の且末の条の文章が混入したのである。要するに、黄氏が「東は白題西（バイテイシー）」と読んで白題西を跋希（バイシー）即ち波斯人に当てているのは誤である。また、『梁書』の末国がインド・イラン系である可能性はあつても、それが今のガルチャ人の先祖であるか否かは、別に考察を要することである。

五基の古墓に続いて発見したのが漢代の烽燧亭の遺址である。ドゴルの南約三五〇里、同行の陳宗器氏の計測によ

ると経度九〇度、北緯四五度一〇分(一六二頁)。その位置するゴビの平面を黄氏は土垠と呼んでいる。この土垠こそ漢代のこの方面の東西交渉の中樞として栄えた地点であり、そこに烽燧亭の遺址が見出された。湖岸の三角州の傍らにあり、三面水にとりかこまれ、北路だけが陸に通じてい、肺のような形をしている。遺址はその三角州の先端にあり、四周には島のような城郭のような土丘が並び立っている。西から東、東から西、いづれから行くにしても、かならず湖に沿って環状に進み、いくつもの土丘を越えてようやくこの遺址にたどり着くことができる。そこは湖の中州になっていて、遺址から湖をのぞむと、土丘がかさなりあうように継続的につづいており、無数の戦艦が風浪の襲撃を避けて海辺に停泊しているように見える。風が起こつて砂が飛び、まるで煙霧がたちこめたようになった。そのなかを白鶴が空を翔び、魚や鴨が戯れ、まことに奇観を呈している。そこは孔雀河の末流が集ったところで、淡水なのである。水はたいへん清くて飲むこともできるし、水浴もできた。ここを過ぎると水はすべて塩水となるので、東へ西へ旅する人びとはここで休息し、以後の長い険しい道を超える準備をするのである。

この地はまさに漢が西域に通ずる北道の要衝であり、玉門関を出入りするものはすべてここを通らなければならな

かった。現代から古代を推しはかつてみても事情は同じであり、かつてここに烽燧亭を設けて旅人を保護したのは必然のなりゆきであった(以上本文一六二—一六三頁)。

黄文弼は烽燧亭の遺構について詳述するとともに、『漢書』賈誼伝、『墨子』号令篇、『說文解字』、唐の『兵部烽式』等の諸書を参考に補説しているが、特に重要視されるべきはこの遺址から黄龍元年十月の文字(簡五六)と元延五年の文字(簡一七)のある二つの木簡が発見せられたことである。黄龍元年は前漢宣帝の死去の年で前四九年に当り、元延五年は前八年に当り、成帝死去の年に相当する。宣帝の神爵三年(前五九)鄭吉が西域都護に任命され、五鳳四年(前五四年)には匈奴单于が漢に降り、漢の勢威が西域に大いに振った時である。いづれにしても烽燧亭の遺址や黄龍・元延両木簡の出土はこの遺址が前漢末に西域に通ずる北道の中心として栄えていたことを意味する。しかも土垠から出土した木簡は元延五年(前八年)を以て最も新しいものとし、それ以後に及ばないので(三八頁)、黄氏は土垠の繁昌は前漢末を以てほぼ終りに近づき、以後例えば交通路の新しい変更の如き情勢の展開によって土垠の重要性に変更を来したのではあるまいかと疑っている。いづれにしても、土垠の遺址の発見によって、前漢末、漢と西域との交通路がこの地を通っていたことが明かにせられたことは

重要である。

黄文弼が前後二回に亘った調査で土垠で得た文物は、木筒約七〇余点、銅器四九二点、鉄器一五五点、漆器・木器および油漆麻布計九七点、絹や麻の衣、履、断片の類計三九点、木や竹の雜器二二点、硝子玉一二点、草具二点、さらに骨、石、陶、ガラス等、すべて合せて六〇〇余点に達する。それでも両回とも時間に追われて、なお十分に調査しつくすことができず、土垠のなかには地下に埋もれたまま第三次調査を待っているものがあるであろうという。

これら出土文物の主要な一々については、第三篇器物国説に詳説してある。木筒については、第四編木簡考釈に(一)官職、(二)土地、(三)曆、(四)屯戍、(五)俸給、(六)器物、(七)古籍、(八)その他、(九)簡牘制度および書法の九部に分けて説明されているので、詳しくはそれに譲るが、中には今後の研究を俟つものがないわけではない。例えば木簡第十、第十一の伊循都尉左(下欠) 長さ三・五、幅一・一、厚さ

〇・三、及び

伊循率史黄広宗 二〇(下欠) 長さ五・九、幅〇・八、厚さ〇・三、(共に簡版五、木簡模本、簡一〇表裏及び簡一二)

の如き、第十は伊循都尉左某という漢人官吏の名、第十一は伊循率史黄広宗に関する記事の断片であるが、それらが

批評と紹介 榎

何故にこの土垠の烽燧亭の附近に残存していたのか、そもそも土垠と伊循とが如何なる関係にあるのか、明かにさるべきことが少くない。伊循に都尉の設けられたのは、『漢書』西域伝、鄯善国の条によれば「其の後更に都尉を置く、伊循に官の置かれしは、此に始まる」とあって、尉屠屠を楼蘭王に任じ、その請により、漢から司馬一人・吏士四十人を派遣して伊循に屯田せしめ尉屠屠の後補たらしめた元鳳四年(前一〇七)より何年か後のことのようにであるが、その正確な年分は不明である。黄文弼氏は恐らく『水経注』の記事に基づいて伊循をミールンの附近に位置せしめて疑われないが(本書索引参照)、長沢和俊氏は木簡の出土した土垠こそ伊循ではなかったかと疑っている(『楼蘭古城にたざんで』二〇一頁)。また、黄文弼氏は『水経注』の記事に基づいて伊循城を尉屠屠王が漢の勢威を背景とした国都であるとしている(三八頁)。しかしそれならば伊循城には最初から都尉が設けらるべきで、設置の後若干年をおいて都尉が設けられたのは不可解ではないか。或いは伊循城の事情を見極めた上でここを国都することに定め、都尉の官を置いたのであろうか。

徐松はその『漢書』西域伝補注に

補に曰く、水経注に言う、鄯善国伊循城に治すと、蓋し地肥美なるを以て徒して之に都せしならん。

と述べている。ここに引く『水経注』は卷二「南河又東して且末国の北を巡る」の注文の中に

又曰く、且末河東北流し、且末の北を^す選ぎ、又流れて左して南河に会し、会流して東逝す、通じて注濱河と爲す。注濱河又東して鄯善国の北を巡、伊循城に治す。故の楼蘭の地なり。

とあるのを指している。伊循城が鄯善国の都であるのならば、『漢書』西域伝、鄯善国の劈頭に

鄯善国、本名楼蘭、王治扞泥城。

とあるのを、「王治伊循城」と記すべきではなからうか。そうした記事がないのは伊循城が鄯善の王都でなかったか、或いは伊循城の別名が扞泥城であったことを言っているか、或いはそのほかの事情であることを示しているのしか考えられない。

私は扞泥は楼蘭語で首府 (capital) 或いは王城 (citadel) を意味する *kuhani* (and *khvani*, *khvānernei*) (F. W. Thomas, *Acta Orientalia*, XII, p. 61. cf. T. Burrow, *The language of the Kharos̄hi Documents from Chinese Turkestan*, Cambridge, 1937, p. 84) の漢字音訳であると考えるものである。

従ってまず考えられることは、漢書は扞泥城を固有名詞とし、伊循城とは全く別の場所と看做したことである。こ

の場合には伊循城は鄯善国の王都ではないことになる。

第二に考えられることは、『漢書』は扞泥城が王城を意味することを理解し、伊循城の別名としてこの名を挙げ、知識の博いことを示そうとしたことである。この場合にはその場所は明かでないにしても、伊循城は即ち扞泥城そのものである。

第三に考えられることは、楼蘭・鄯善を通じて王城は同一場所に在り、扞泥城 (即ち王城) と呼ばれていたことである。それが何時まで続いたか明かでないが、とにかく或る時期まで鄯善の都は楼蘭の時と同様扞泥城にあったのである。

こうした三つの場合を考えると、(一)楼蘭が鄯善と改名せられた時、その王の治城は楼蘭の中の扞泥城に在った。そして、(二)そうした状態が恐らく後漢の初期まで続いたと見るのが正しいようである。後漢の初期というのは、鄯善が強大となって、小宛・精絶・戎盧・且末を併合し、渠勒・皮山を併せた于闐、郁立・单桓・孤胡・烏貧訾離を併せた車師と共にタールム盆地の三大強国の一つとなった頃を指すのである。

いづれにしても、徐松のように伊循城を鄯善の都城と速断するには、なお少からぬ疑問が残る。

なお烽燧の制度については、陳夢家『漢代烽燧制度』(『漢

簡綴述」所収)、藤田豊八「烽燧につきて」(『劍峰遺草』所収)、勞榘「積漢代之亭障共烽燧」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第十九本、民国三十七年、所収)、賀昌群「烽燧考」(『中大文史哲學季刊』第一卷二期所収)等の論考を挙げる事が出来る。

二

土垠出土品とその図示・解説を『ロプノール考古記』の最も重要な部分であるとすれば、それに劣らず重要な記述は第一篇緒論第二章の「楼蘭国歴史略述」以下それに関連する諸章であろう。中でも黄氏が「鄯善と楼蘭の国都問題」として論じている部分は、楼蘭と鄯善の中心がどこにあったかを定めようとしている意味で、特に注意を惹く。

『漢書』卷九六上西域伝の鄯善の条には

鄯善国、本名楼蘭、王治扞泥城、

に始まり、昭帝の時、傅介子をして王嘗(安にも作る)婦を殺さしめ、漢に在った尉屠耆を立てて新王としてこれを楼蘭に送り込み、国名を鄯善と改めた。新王は自ら漢の天子に乞うて、国内の伊循城に漢の一将を遣し、屯田積穀せしめ、その威重によって楼蘭王としての權威を維持せんとした。漢はこれを容れて司馬一人・吏士四十人を遣し、伊循に屯田し填撫せしめ、その後更に都尉を置いて漢の控制

力を高からしめんとしたことを記している。司馬一人・吏士四十人にはその家族や随従もついていたことであろうから、その人数の総計はこの何倍かに上ったことであろう。この『漢書』の記事が楼蘭或いは鄯善に関する最も古い纏った記事である。

これまで鄯善の改名は国都の移動を意味し、楼蘭は都を鄯善に移され、その鄯善は即ち伊循城であり、扞泥城は、また別の場所にあるように解釈されてきた。黄氏も同様で、楼蘭は一九〇〇—一年ヘティンの発見したクロライナ(LA)、伊循城はチャルクリック付近とし、扞泥城はミラン遺址であると考えるスタイン説に対し、一九三一年発見した古烽燧亭遺址から遠からぬところにあると考えられるので、第三次の調査を行う予定であったという(五〇頁)。

しかし、漢書の記事による限り、鄯善は楼蘭の改名で、位置に移動はない筈であり、前に一言したように扞泥城は国都の中の王城の名で、王城を意味する *khanai* (*khanai*) の音訳であると考えれば、楼蘭も初期における鄯善も扞泥城も同一場所を意味しているにすぎないのではなからうか。『水経注』はこの三所を別地として記述しているが、それは『漢書』より少くとも四世紀後の記録である。我々はまづ『漢書』の記事を中心に考察を進めるべきではあるまいか。

『ロブノール考古記』（一九四八年刊）が世に送られてから四十一年。楼蘭遺址の調査は大いに進み、遺址の調査や出土の記録類の検討を経て楼蘭の歴史は次第に明かにされつつある。今はそうした新資料を基礎に新しい楼蘭の歴史を書くべき時期に達している。伊藤敏雄・片山章雄両氏の編になる『近一〇年楼蘭・ロブノール関係文献目録』（一九七九—一九八八年）を見てもここ十年の楼蘭の研究の進歩のすさまじさの一斑を知ることができるであろう。『ロブノール考古記』は今や書きつがるべき時期にきている。私はロブノール考古記について、その後四十年の研究の進歩の迹を一瞥し、本書書評の第三部とする予定であったが、それは本書記述の範囲の外にあるだけでなく、関連資料の中入手困難なものがあるので、予定を変更してこれを将来に期することとした。本書紹介の筆をここに擱く所以である。

『羅布淖爾考古記』は民国三七（一九四八）年出版せられた。その現物は見たことはないが、昭和四三年（一九六八）、その美事な複製が大安（書店）から世に送られ、昨昭和六三年、香港の無記名書店で、B5版に縮印複製せられた。香港本の貧弱さは人を驚かすものであるが、田川氏邦訳のロブノール考古記は、その体裁の立派さにおいて、その翻訳の美事さにおいて、群を抜いている。器物及び木簡の黒

白図版のほかに、恐らく原本にはない着色の図版四頁を加え、器物図版三十頁、木簡図版六頁がつけられ、殊に詳密を極めた巻末の索引（三九三—四一五頁）は本書の利用を一きわ高めている。細部について多少問題がないわけではないが、この邦訳の出現は学界に寄与する所大きいであろう。

追記。一頁に近い余白ができたので、若干追記する。

(1) 六、三六頁。『史記』大宛伝にいう。楼蘭、姑師の邑。城郭有り。は「楼蘭、姑師。邑に城郭有り」と読むべきであろう。「楼蘭、姑師地方では邑に城郭有り」の意である。

(2) 扞柴（二六、八九頁、九〇頁）、扞罕（六一頁）、扞彌（六五、一〇〇頁）[China Bazar, 策動]は標記一定すべし。

(3) 二九頁。「龍泉に抵り」は「龍泉に抵り」。

(4) 三九頁。「ニヤ北方の廢墟でカロシユテイ文字および篆文で「鄯善」四字が刻まれた一つの封泥」とあるが、これにはカロシユテイ文字は無い。一七頁には単に「篆

書」で「鄯善印記の四文字が刻まれており」と記す。

(5) 四〇頁（下から六行目）、「必ず死さん」は「必ず死なん」。

(6) 四二頁（上から第一行）、「下えるべし」は「下うべし」。

（下から第七行）（補遺は）は原文には「輯補」。

(7) 四三頁（上から第三行）「洛陽に東遷」は「建康に南遷」の誤。

- (8) 四六頁。(上から第二行)「伊循域を^へ経る」は「伊循域を^へ經」。(下から第十一行)「伊循を屯田し」は「伊循に屯田し」。
- (9) 五二頁。(上から第十三行)「禦し能わず」は「禦する」或いは「禦ぐ」能わず」。
- (10) 一一五頁。(上から第七行) 部密は都密、(第十四行) カドキセスはカドワイセス。
- (11) 一一六頁。(上から第五行)「治^{あまた}き」は「治く」。(上から第十二行)「莎車亦^も」は「莎車も亦」の誤ならんも、この語原文になし。(第十三行)「その強さ」の「その」原文になし。
- (12) 一二二頁。(下から第十一行)。(ベルグマンはペリイマン(索引四一一頁ベルグマンの条参照))。
- (13) 一二九頁。(下第一行)[Serindia]L. fig. 133は原本Serindia L. Fis 153と記す。
- (14) 一二三頁。(下から第十一行)「アムール大道」は「アム大道の誤ならん。原文には「月氏・安息均臨嬌水即阿姆河」(九〇頁)とあり。
- (15) 一二五頁(上から第十六行)「付^すなり」は「付^すするなり」。
- (16) 一二七頁。(下から第七行)「載^せる」は「載^す」。
- (17) 卷末の英文序文には、誤植及び意味不明の箇所少からず、宜しく書改むべし。